

21世紀の日本のかたち（92）

建築について（6）

日本の国会議事堂



戸沼幸市

<（一財）日本開発構想研究所 代表理事>

1. 戦後70年の国会・国会議事堂の風景

平成27（2015）年5月14日、安倍晋三内閣は「安全保障関連法案（安保法案）」を閣議決定し、国会に提出しました。この法案を巡って、衆参両議院の激しい審議を経て、7月16日に衆議院を通過し、9月19日未明には参議院において自民、公明などの賛成多数で国民注視の中、可決成立しました。

資1 参議院本会議



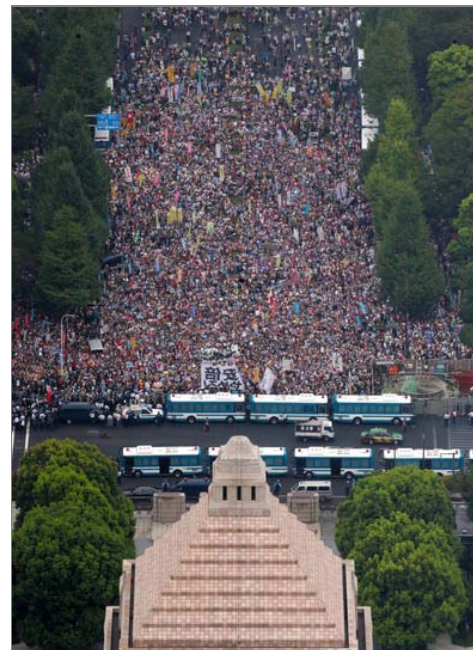
（朝日新聞デジタル版）

この経過については、法案提出以来、この国のかたちの根幹をなす憲法、なかんずく9条に違反するのではないかという議論があり、連日、国会審議の様子が新聞、テレビなどで報道され、永田町の国会議事堂がクローズアップされました。安全保障関連法案が参議院で採択される日が近づいた8月30日の日曜日には、永田町の国会議事堂前、50メートル幅

の道路は抗議する人々でびっしりと埋めつくされました。

資2 国会前で安保関連法案反対を訴える人達

（8月30日午後2時7分）



（朝日新聞デジタル版）

この法案が参議院で成立した9月19日にも多くの人々が国会前で夜を徹して抗議の声を上げておりました。今度の安保法案については日本を取り巻く安全環境の変化に対応するものだという政府の説明も具体的には分かりにくく、この集団的自衛権の行使を可能にする安保法案は憲法9条に違反するという多くの憲法学者、憲法の番人である歴代の内閣法

制局長官の説を否定するものでした。憲法は国のかたちの根本を支えるはずのものです。国会の決定は議会制民主主義のもとで、国民によって選出された議員の数でなされるものであり、現在、安保法案に反対ないしは疑問とする国民が半数を超えているにもかかわらず、この法案成立は棄権者多数の前回選挙で選ばれた絶対多数、自民党主導によって成立したものではありません。「議会制民主主義の罨」ともいえます。

デモに取り巻かれて国会議事堂がクローズアップされるのは日本の平和、安全に関する事態が問題になる時です。

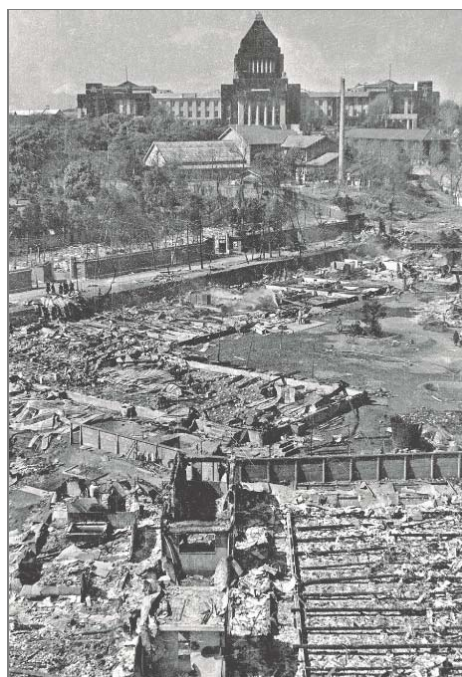
日本は昭和20（1945）年8月にポツダム宣言を受諾し、太平洋戦争が終結し、昭和22（1947）年、日本国憲法^(注)を制定施行しました。そして昭和26（1951）年にサンフランシスコ講和条約を結び、日米安全保障条約を調印しました。その後、岸信介内閣は昭和45（1960）年に日米安全保障条約改定法案を提出しましたが、これに対する60年の安保反対運動は労働者や学生が組織を作って国会議事堂に突入を試みるなど、激しいものでした。

今回の2015年安保関連法案反対デモの参加者は組織的というよりも、学生も一般の人々もスマホ片手の個人「私」の集まりであり、情報ネット社会の「不連続の連続」といった風景に思えます。

国政の中心、国会議事堂は、戦前この永田町の高台に昭和11（1636）年、大日本帝国憲法時代に建築されたもので、この場所、この建築物の中で、軍部主導の太平洋戦争開始の決定がなされました。広島、長崎への米軍による原爆投下、沖縄での激しい地上戦を経ての、昭和20（1945）年8月15日の終戦でした。

資3 黒く塗られた国会議事堂

(3月10日空襲直後の様子)



(東京新聞ビジュアルタ刊 2015. 02. 21)

日本の国土はアメリカの空襲によって多くの都市が壊滅しましたが、東京もB29からの大量の焼夷弾によって焼け野原と化しました。終戦直後、昭和20（1945）年秋の東京の様子を米軍が撮影しており、その中にコール・ターールを外壁に塗りつけた擬態ですが、焼け跡に立つ国会議事堂の写真があります。

資4 米軍が撮った焼け跡に立つ国会議事堂



(『米軍が見た東京1945秋』佐藤洋一 洋泉社、2015)

中央には空に向かう基壇状の大日本帝国議会の塔屋を持ち、両翼に衆議院、貴族院の議会棟を広げた全貌が皮肉にもくっきりと姿を現しているのです。終戦直後、GHQ（連合国最高司令官総司令部）のダグラス・マッカーサーが占拠した第一生命ビルから遠望した国会議事堂の写真もあります。

資5 第一生命ビルから遠望した国会議事堂



（『米軍が見た東京1945秋』佐藤洋一 洋泉社、2015）

日本が敗戦から立ち上がり、平和憲法を制定し、議会制民主主義を根付かせて、高度成長を成し遂げた20世紀後半の日本の戦後史に、「大日本帝国」の名を取り去って「国会議事堂」となった建築は、元の形のままで国政の焦点として存在続けています。

この間、戦争によって焼け野原となった東京は、人や物、経済の一極集中が進み、建設時日本一の高さを誇った国会議事堂も、高層化するビルの中に埋没することになりました。

注) 日本国憲法前文より

「日本国民は、正当に選挙された国会における代表者を通じて行動し、われらとわれらの子孫のために、諸国民との協和による成果と、わが国全土にわたつて自由のもたらす恵沢を確保し、政府の行為によつて再び戦争の惨禍が起ることのないやうにすることを決意し、ここに主権が国民に存することを宣言し、この憲法を確定する。」

2. 国会議事堂建築の概要

皇居と向き合って永田町の高台に建つ現在の国会議事堂は、太平洋戦争の少し前、昭和11年11月に竣工したものです。この建築の建設の経緯については、大蔵省営繕管財局編の帝国議会議事堂建築の概要（昭和11年11月1日発行）に詳しく述べられております。これを参考に、現在の視点から、この建築のかたちのもつ意味について改めて考えてみたいと思います。

日本に国会議事堂を建てることになった経緯をたどるならば、明治政府が国づくり、国のかたちづくりの中心に天皇制を柱に大日本帝国憲法（明治憲法）を制定し、これに合わせて国家プロジェクトとして帝国議会議事堂建設を必要としたことに始まります。

いつ議事堂を建てる必要が起こったか

以下は上記「帝国議会議事堂建築の概要」の書き出しです。

「帝國議會議事堂は今秋愈々竣工して、帝都の中央永田町の高臺に、白堊の高塔を中空に聳え立たせている。（中略）

畏くも、近代躍進の日本の礎を固く築かせられた明治天皇は明治元年三月十四日に、五箇條の御誓文を御下しになって、『廣く會議ヲ興シ萬機公論ニ決スヘシ』と宣はせ給ひ、こゝに新日本の政治の行くべき道を御示しになった。

かくて新興の意気に燃えた日本の蒼生は國家興隆の爲に日夜努力するとともに、明治七年に民選議院設立の建白書を奉り、明治天皇に於かせられても翌八年四月十四日立憲政體に関する詔書をお下しになり、明治十四年十月十二日には『明治二十三年ヲ期シ議員ヲ召

シ國會ヲ開ク』旨の勅諭を給はつたのである。

かうして明治二十二年の紀元節を卜して大日本帝國憲法が發布され、愈々帝國議會を開くことになつたのである。かうなると帝國議會を開く場所即ち、帝國議會議事堂が必要なわけで、これが抑も我が國の議事堂建設の起りである。」

議事堂建築準備—官庁集中計画

明治維新、江戸城を皇居として始まった東京遷都、首都のかたちの具体化のために、明治政府は内閣に臨時建築局をつくり、国会議事堂を含む中央官庁集中計画をつくりました。

このために日本から技師を当時勢いのあつたドイツに留学させ、ドイツから建築家ウィヘルム・ベックマン他を招いて、官庁集中計画の策定を依頼しております。この中にベックマンの洋風の国会議事堂案もありました。

資 6 官庁集中計画（ベックマン案）

（明治19年6月立案）



『明治の東京計画』(藤森照信著, 岩波書店)より

この時代、日本は服装も建築も和風から洋風へと欧化、いわば「文明開化」の波に呑み

込まれてゆきました。

仮議事堂

当初想定された本格的議事堂は、財政上の理由から建設が見送られ、国会は木造の仮議事堂がつくられてそこで行われました。

第1回仮議事堂

明治23 (1890) 年 木造洋風2階建 火災焼失

第2回仮議事堂

明治24 (1891) 年 木造洋風2階建 火災焼失

第3回仮議事堂

大正14 (1925) 年 木造洋風2階建

この建物は現在の議事堂が完成するまで使用されました。

また、広島臨時仮議事堂（明治27 (1894) 年竣工、洋風平屋）が、日清戦争時、大本營が広島に置かれたため、設置されております（第7回帝国議会で使用のみ）。

実施計画

仮議事堂から本格的帝國議事堂を建設することについて、明治19 (1886) 年、内閣に臨時議院建設局が設けられてから30年余を経て、ようやく実施に向けて気運が高まり、本格的国会議事堂について、大正7 (1918) 年、意匠設計の懸賞募集が行われました。参加者は帝國臣民に限るとし、議院建築として「相当の威容」をもつ意匠を求めたのです。一等案は宮内技手の渡辺福三、審査員は辰野金吾他、実施案はコンペ当選案を手直してつくられました。

建築概要

名 称：帝國議會議事堂
敷 地：69,245㎡（現在は103,001㎡）
敷地標高：本館前面地盤 26.66m
正門前地盤 20.30m
西館前地盤 29.69m

本館

建 坪：12,396㎡（現在は13,356㎡）

延床面積：52,165㎡

階数：一般 3階（一部4階）外に地

下階

中央塔 9階

幅員：正面 206.36m

側面 88.63m

高さ：一般 20.91m

中央塔 65.45m

構造：鉄骨鉄筋コンクリート造

総室数：392室

議場議席：貴族院 460（最大635）

衆議院 466（最大635）

傍聴席：貴族院 770

衆議院 933

外装：3種類の花崗岩の石張り

内装：3種類の大大理石、2種類の蛇紋岩、
木材（杉、桧）

（材料：石材、木材他は全国から調達）

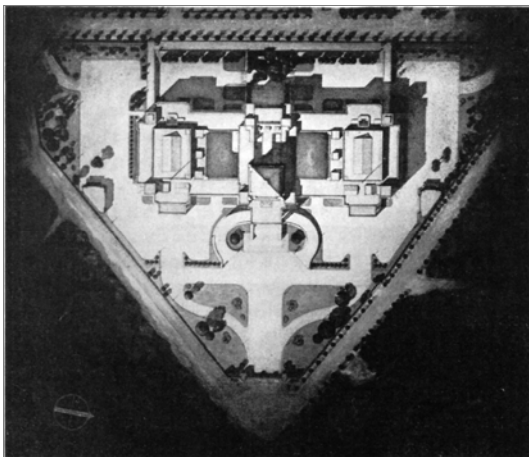
着工：大正9（1920）年1月30日

竣工式：昭和11（1936）年11月7日

所在地：東京都千代田区永田町1丁目

設計：1919（大正8）年、競技設計の当選
案を参考に、大蔵省営繕管財局が
実施設計をまとめる。

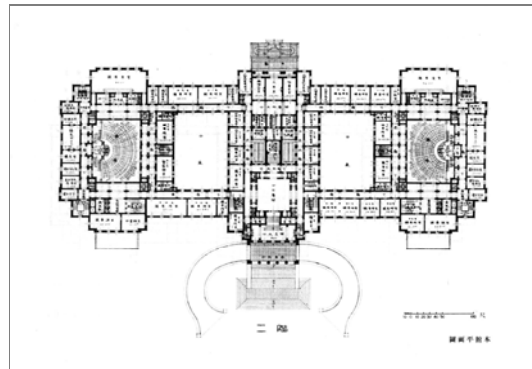
資7 配置図



資8 本館東正面図



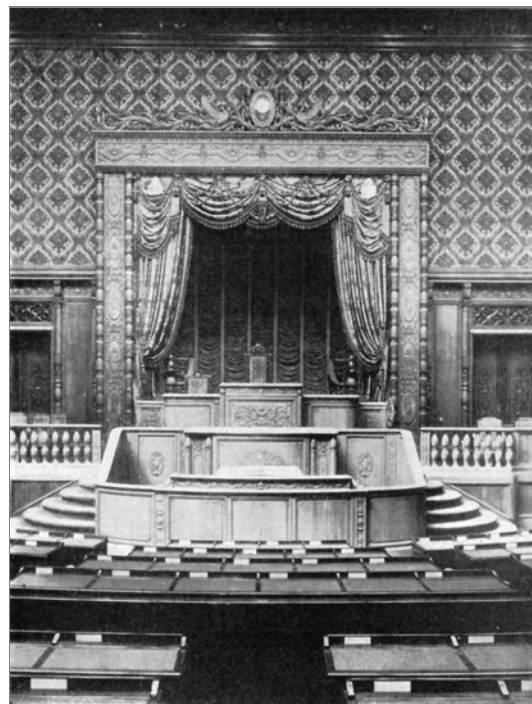
資9 本館2階平面図



資10 貴族院議場



資11 貴族院議場正面



資12 衆議院議場



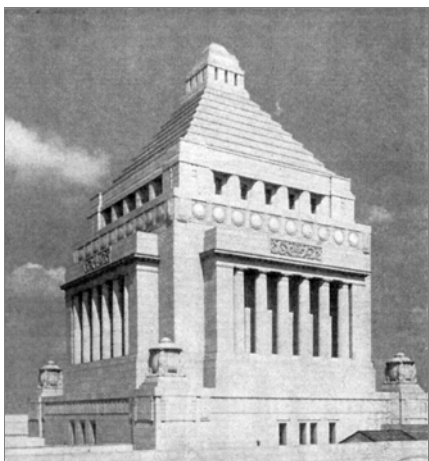
資13 中央広間床大理石モザイク



資14 空から見た議事堂



資15 中央塔



国会議事堂（大日本帝国国会議事堂）設計の意図

国家プロジェクトとして昭和11年に実現した国会議事堂について、その設計意図を私なりに読み解いてみました。

- ①コンセプト—皇居に向き合い、天皇を中心とする大日本帝国憲法の体現。
- ②表現—建築の垂直性（高さ）と水平性（横への広がり）の強調。

台地中心に、天に向かう基壇状の帝冠を載せ、天皇統治の中心軸を設定し、左右対称に水平に両翼を延ばし、貴族院（現参議院）議場（右）、衆議院議場（左）を配置。

- ③高さについて：昭和11年当時、中央塔65.45mは、無線、電信塔を除き、日本一の高さであり、永田町の敷地高、海拔20.30mを加えた塔屋階、92.12mからは、「目を遮るものは一つもなく、品川沖から遠く房総の山々、秩父の連山及び富士山、遠くは中部山岳に至るまで一望のもとに入るのである。」とあります。

- ④花崗岩—永遠の衣を纏って、威容、堅牢、優美な外観の演出。

壁と柱—正面玄関、正面の塔屋、左右の議会棟玄関にエンタシスのある列柱を配して、建物に陰影、彫りの深さをつくり出す。

- ⑤和風から洋風に、高水準の近代洋風建築をつくる。

日本の伝統的建築技術の上に、日本が明治以来獲得した近代西欧建築技術を示す。関東大地震を経験して向上した日本の構造設計技術を組み込んでいる。

- ⑥国産品にこだわる。

材料（石材、木材他）は、気送管、ステンドグラス、扉把手以外、全て国産のものを

使用。

⑦日本の伝統美を内包する

国会議事堂内の諸室の内装における日本の伝統的美術再現。

国会議事堂参観

先日、12月7日の午後、久しぶりに一般参観者に交じって休会中の国会を見学しました。以前、首都機能移転に関する特別委員会に参考人として呼ばれて以来です。五重塔がすっぽりと入る大理石モザイク床の中央広間から中央階段を上ったところに、天皇陛下の御休所があり、総檜造りの木漆塗りで、当時の建築や工芸の粋を集めたものだと説明がありました。

資 1 6 天皇陛下の御休所



(衆議院 参観者パンフレット (平成27年9月版))

テレビなどでよく映し出される半円形衆議院議場は、正面中央に議長席、その左に内閣総理大臣席、国務大臣席があり、議長席の上、正面中央には天皇御座所が旧憲法時代のままに大きく設えられておりました。議員席のテーブルには代議士諸氏の氏名標が国会休会のための横倒しになっておりました。白亜の殿堂の赤い絨毯は有名ですが、これが総延長4 km とは驚きました。議員バッジをつけてこの

絨毯を踏むことが、政治を志す人の夢でありましょう。

資 1 7 衆議院議場



(衆議院 参観者パンフレット (平成27年9月版))

見学当日は好天の紅葉の美しい日でしたが、正面の広場に続く庭園には、全国47都道府県からの献樹が植えられ、皇居の森の樹木と連続した景観をつくり出しておりました。国会と密接する首相官邸の四角い建築は国会議事堂と比べていかにも機能主義的な軽量建築で、時代の差、コントラストを感じます。

資 1 8 国会議事堂の今 (その1)



(撮影：松本泰生)

国会議事堂は1936 (昭和11) 年の竣工からほぼ80年、戦前、戦中には戦争のエンジンとなり、戦後70年に及んだ日本の国づくりの中心となり、日本の政治史、歴史を呑み込んで

生きつづけ、今後も21世紀の日本の政治の焦点として存在し続けるのでしょうか。私が追求している「首都機能移転」については未来の日本国会議事堂とともに、国会預かりのままです。

資19 国会議事堂の今（その2）



(撮影：松本泰生)

資20 国会議事堂の今（その3）



(撮影：松本泰生)

資21 国会議事堂の今（その4）



(撮影：松本泰生)

2015年の世相

2015年は安保関連法案の可決（9/30）につづいて年を跨いで持ち越しとなった課題が山積しております。これに対する舵取りが行われる国会、国会議事堂周辺はどんな風景になるのでしょうか。

沖縄辺野古埋め立てについて翁長雄志沖縄県知事は沖縄県のみを負担を強いるのは正常ではないと国と法廷で争っています。

2020年東京オリンピック・パラリンピックの主会場となる新国立競技場もコンペ案が見直しになり、神宮の森に配慮した「木と緑のスタジアム」をコンセプトとしたデザインが採用されることに決まり、地元新宿区都市計画審議会の要望通りになり幸いなことです。

地球温暖化にも関係するのか、記録的な豪雨で関東では鬼怒川が決壊し（9月）、茨城・常総では大勢が避難する事態となりました。

東日本大震災も5年目を迎えることになりましたが、復興は道半ばです。

そして、IS「イスラム国」による今年1月のフランス・パリ新聞社襲撃事件につづいて、11月パリの中心部のコンサートホール、北部のサッカー場、カフェを襲うISによるテロ事件が起こりました。

何か地球大で、これまで築いてきた人間の文明社会に大きな地核変動が起きているのではないかとすら予感されます。

この様な日々が続いた12月、日本の技術陣が5年前に打ち上げた金星探査機「あかつき」が、地球と兄弟星の金星の軌道に乗ったニューースが飛び込んで来ました、快挙です。

あかつきの送ってきた縞模様の金星画像と地球を見比べてしまいます。

1万年、1億年後の地球の未来はどうなっ

ているのでしょうか。

12月13日、パリで開かれていた国連気候変動枠組条約第21回締約国会議（COP21）で地球温暖化対策として気温上昇を2度より低く抑えるとしたパリ協定が採択されました。また、今年のノーベル賞には日本人として、物理学賞に梶田隆章氏、医学生理学賞に大村智氏が選ばれました。両氏ともに、良き仲間を支えられての受賞だとコメントしておりました。文学賞にはベラルーシの女流作家ベトラーナ・アレクシエビッチ氏が選ばれました。チェルノブイリ原発事故を生々しく記録した「チェルノブイリの祈り」は、福島原発事故にも重なります。

日本の若い人々の活躍するスポーツ界の話題として、今年はイギリスで行われたラグビーワールドカップ2015で世界の強豪南アフリカを破った日本チームの大活躍があり、五郎丸歩選手のあのポーズとともに心に残ります。

フィギュアスケートの羽生結弦の抜群の演技、その他各種スポーツ界での10代20代の選手達の世界の舞台での若々しい活躍は、2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて頼もしいことです。

今年はまた、戦前生まれで戦争を体験し、戦後の日本の歴史に主張をもって併走した人達が多く世を去りました。

鶴見俊輔（93歳）、戦後日本社会の近代化のかたちを評論しつづけた哲学者でした。原節子（95歳）、石坂洋次郎の小説を映画化した「青い山脈」では、若くみずみずしい女英語教師役で、息苦しい戦争から解放されて、自由恋愛を渴望していた高校生にとって、空に突き抜けるような新鮮さでした。水木しげる（93歳）、ゲゲゲの鬼太郎を生み出し、闇

の中のぼうつとした明るさを画いたユニークな漫画家は南方の戦場で左腕を失い、片腕で戦争場面の残酷さを克明に描いて、私どもに戦争の不条理を生々しく伝えてくれました。

北の湖（62歳）、大鵬と並んで北海道生まれの堂々たる日本人横綱は、昨今の超高齢化社会ではいかにも若死にでした。

金泳三（87歳）、韓国の民主化を推進した元韓国大統領は、早稲田大学特命教授でもありました。早稲田大学は、戦前、戦後と韓国（朝鮮）の留学生を大勢受け入れてきた実績があります。金元大統領は「過去にとらわれない両国の若者がアジア太平洋時代の主役に」と早稲田大学で学生達に語ってくれたのが印象に残ります。

12月9日には野坂昭如（85歳）の訃報に接しました。早大仏文中退で昭和一桁の焼跡闇市派は、独特な語り口で多彩な表現を用いて戦後日本の世相に切り込んで、欺瞞を暴き、反戦思想を貫きました。早稲田大学の「新宿学」には講師として小沢昭一とともに呼んで、新宿物語を講じてもらいたかったのですが。

今年は、有名無名、私の身の回りでも高齢な多くの人々が他界しました。高齢多死社会に入ったことが実感されます。

今年は、私自身として夏以来「吉阪隆正+U研究室の建築」の展示会の企画に実行委員として参加しました。U研究室のコンピューター、パソコンでの設計以前の手描きの膨大な図面を整理して、文化庁・国立近現代建築資料館に納めることが出来ました。

この12月3日から来年3月13日までの開期で、近現代建築資料館において「みなでつくる方法—吉阪隆正+U研究室の建築」展が開かれております。

21世紀の日本のかたち 世界のかたち
—どこからどのように見るか—

師匠、吉阪隆正（1917－1980）から死の直前、小鳥を頭に乘せた奇妙な動物の画いてある1枚のハガキがとどきました。この使者の小鳥に返画として「ケイタイを持った21世紀のミノタウロス」を画きました。

- | |
|--|
| <p>1 吉阪隆正より戸沼氏宛に届いたハガキ
(1980年11月1日)
Postcard from YOSIZAKA to TONUMA
(1980.11.1)</p> |
| <p>2 戸沼氏より送られた吉阪への返画
(2009年1月1日)
「ケイタイを持った21世紀のミノタウロス」
Drawing sent back to YOSIZAKA by TONUMA
"twenty-first century Minotaur holding a cell phone"
(2009.1.1)</p> |



吉阪は3.11東日本大震災に伴う原発大事故を見透かすように、人類が危機をもたらす領域に入るのではと危惧する「文明の反曲点」の図も残しています。吉阪は常々人間が機械とならずに人間らしく生活を営むことができると心配しておりました。

登山家でもあった吉阪は「歩いてく人(と)ーアーキテクト」を自称し、地球の方々に出掛けて行きました。幼少期はジュネーブで、壮年期はパリ、ル・コルビュジエのアトリエでと、西欧どっぴりから、後年、第三世界、東洋回帰の気配があり、西側先進国よりもアフリカ、南米、アジアの地域に出掛け、貧しい側から、これを応援する見方を書き綴っておりました。これに合わせて、サイコロにした地球儀や独特な世界地図、例えば南極中心の地球地図を画いて、国連本部は南極に置くべしというのです。日本海側から見た日本列島、逆転の21世紀日本の構図も描いています。しばしば問題を逆から突いてくるのです。その上で固体相互、群衆と群衆の「相互信頼」の大切さをいろいろな場面で説いておりました。

1960～70年代、全国を吹き荒れた大学紛争時の緊迫した状況下、早大理工学部長として、仏典、聖書、コーランまでを援用して、主観的実存たるそれぞれの「私」からの見方を重視しつつ、大学の信頼回復を学生たちと論争した『告示録』が残っております。

建築、地域社会（国家もそのひとつ）の在り方を追求した吉阪の『生活とかたちー有形学』ではどうしたら寛容をもって人と人が仲よく、戦争のない世界ができるかと「平和（愛）」をコンセプトの中心に据えておりました。吉阪は先の戦争体験を強烈にもつ大正生まれでした。

吉阪の終生のパートナー 大竹十一（1921－2004）は吉阪の「動」に対して「静」、全く出不精な人でした。U研究室にどっかり座って、吉阪の集める玉石混交の情報を選択し、課題を見据えて造形（建築）に当たっておりました。「建築にいい垢が付かなくなったのは何時頃からだろうか、これは何か重大なことかもしれない」と晩年私に語った言葉は今も心に引っ掛かっております。

21世紀の日本のかたち、世界のかたちを、20世紀の後半に吉阪たちの残した言葉や仕事が合せ鏡のように写し出すのかもしれない。この「みなでつくる方法—吉阪隆正+U研究室の建築」展が若い人々につながって、日本のかたち、世界のかたちについてさまざまに対話する場となってほしいものです。

資22 「みなでつくる方法—吉阪隆正+U研究室の建築」展
パンフレット



(近現代建築資料館)

【注】

P5～P6の資7～資15は、『帝國議會議事堂建築の概要』大蔵省営繕管財局（昭和11（1936）年）による。

(2015. 12. 22)